

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その10－

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームは、平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相について研究を行っており、今年度で10年次目を迎える。過去には、遺跡のデータベース作成、研究略史の整理と主要遺跡地名表・参考文献リストの作成、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成、土器編年案構築に向けた一括出土事例や貝塚等の層位的出土事例の検討、堀之内1式土器、堀之内2式土器の編年案の作成、主要遺跡の分布図の作成を行い、基礎資料を整備した。平成26年度以降は、具体的な遺構の検討に入り、主要な住居址形態を抽出した集成図を作成するとともに、平成27年度は、住居址検出遺跡の分布状況、住居址の平面形態・張出部形態、平面規模、主柱穴配置・壁下構造・建替え、拡張、炉址、埋甕・その他付帯施設等の各要素を抽出し、検討を加えている。平成29年度は、住居址以外の遺構の様相について扱い、堀之内式期の遺構の特徴を掴もうと試みたところである。

今年度は、これら各遺構の検討を踏まえて集落構造・集落分布の分析を行う。ただし、集落構造を把握するためには、ある程度遺跡全体を調査していることや、遺構の遺存状態が良好で帰属時期が明らかにできる出土遺物に恵まれるなど、条件的な制約が多く、集落全体の話となると一定の傾向を抽出することさえ困難であることが多い。そのため、今回は堀之内式期に属する遺跡のうち、ある程度遺跡の全体または主体的な部分が把握できたと考えられる事例を任意で選択し、それら遺跡の集落構造を概観することにした。取り上げた遺跡は、県東部では横浜市小丸遺跡、華藏台遺跡、山田大塚遺跡、川和向原遺跡、原出口遺跡、県央部・県西部では平塚市王子ノ台遺跡、真田・北金目遺跡、伊勢原市下北原遺跡、秦野市曾屋吹上遺跡の9遺跡に絞っている。同時に、集落遺跡の分布についても分析している。

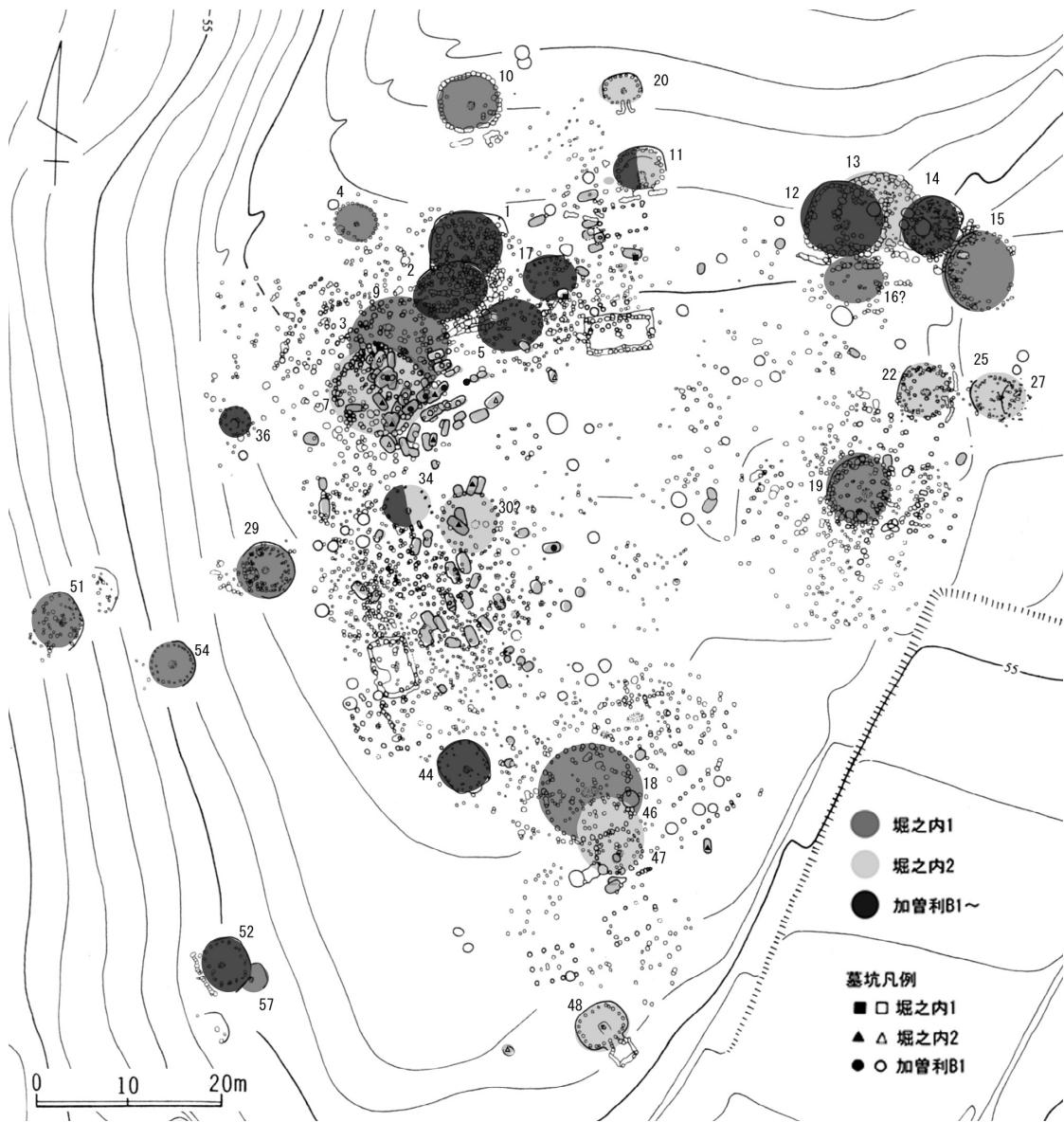
また、昨年度（住居址以外の遺構）の補遺として当該期の貯蔵穴について概観する。土器以外の遺物についても、石器・土製品・石製品・骨角製品を集成し、検討を加えている。(野坂)

II. 集落構造

小丸遺跡

遺跡は横浜市都筑区大丸11に所在し、鶴見川の支流である早渕川と谷本川にはさまれた台地上に位置する。該期の遺構は標高52m～62m付近に分布する。後期の住居址33軒（堀之内1式期12軒、堀之内2式期12軒）、時期不明を含め掘立柱建物址40棟、墓坑110基、貯蔵穴52基などが発見された。

住居址の分布をみると、大きく四つに分けられる。尾根状台地の北側に東と西の各一群、尾根の南側の一群、さらに西側の斜面部に散漫な分布が確認できる。堀之内1式期の住居址として、北西部に3号、4号、9号、10号住居址が、北東部で16号、15号、19号住居址が、南部にて18号住居址が、西側斜面に28号、51号、54号、57号住居址がそれぞれ群をなす。堀之内2式期になると西斜面の住居はなくなり三つにまとまり、北西部に



第1図 横浜市小丸遺跡後期遺構配置図 (S=1/800)

住居が集中するようになる。北西部に7号、22号、20号、30号、34号住居址が、北東部で13号、22号、25号、27号住居址が、南部にて46号、47号、48号住居址がそれぞれまとまる。

特筆すべき点として、貯蔵穴の分布もこれらの住居址群と重なる（石井1999、p.373）。一方、掘立柱建物は、北西部や北東部住居址群の南に集中する傾向がある。これらのなかの7基に炉址の共伴が認められ、37号掘立柱建物址が堀之内2式期の22号住居址に切られることから、他の掘立柱建物址もこの時期のものとすると、堀之内2式期に住居の集中する北東部と北西部に対峙するような位置にある（石井1999、p.376）。堀之内1式期の墓坑は3基のみであるため分布の傾向が認められないが、堀之内2式期は、希薄であるが住居に隣接して広く集落全体に分布する。とくに30号、34号住居址に位置する墓坑は10号～13号、29号～33号掘立柱建物址と重複する位置にある。

(阿部)

華蔵台遺跡

遺跡は横浜市都筑区荏田南5丁目10付近に所在し、鶴見川の支流早渕川と谷本川にはさまれた台地上に位置する。該期の遺構は38m～48m付近に分布する。縄文時代後晩期の住居址49軒からなる集落が発見され、堀之内1式期の住居址14軒、堀之内2式期の住居址11軒を数え、後期の掘立柱建物址は12棟、貯蔵穴はその可能性のあるもの含め31基、墓坑は甕棺や埋設土器を含め69基がある。

住居址の分布をみると、該期の住居は大きく北、中央、南の三つに分けられ、中央と南はさらに東西に分けられることから計5つの群からなる。堀之内1式期の北部は36号、37号、38号、41号住居址からなり、中央東斜面部に11号、45号、47号住居址、中央西部に2号住居址、南西部に24号、26号住居址、南東部に17号、19号、20号、21号住居址が位置する。堀之内2式期では、北部に34号、35号、37号住居址が、中央東斜面に44号、48号住居址、中央西部に2号住居址、南東部に28号、30号、31号住居址、南西部に16号、43号住居址が位置する。住居の分布に対応するように掘立柱建物址が展開し、北部に2号、3号、10号掘立柱建物址が、中央東部に掘立柱建物址であった可能性のあるピット群（12号掘立柱建物址）が存在し、中央西部に1号、4号、5号、6号掘立柱建物址、南東部と南西部の間に7号、8号、9号、11号掘立柱建物址がある。

貯蔵穴も住居のまとまりと重なり、北部の一群と南部の一群に分布する。墓坑の多くは堀之内2式～加曾利B1式期の16号住居址の前面もしくは中央広場に集中する。該期の墓坑として、堀之内1式期では、東斜面の11号住居址の前面に54号土壙が、住居が集中する北群にて2基の埋甕がある。堀之内2式では、南東部と南西部の中間の位置に堀之内2式期の可能性のある墓坑が2基確認された。

（阿部）

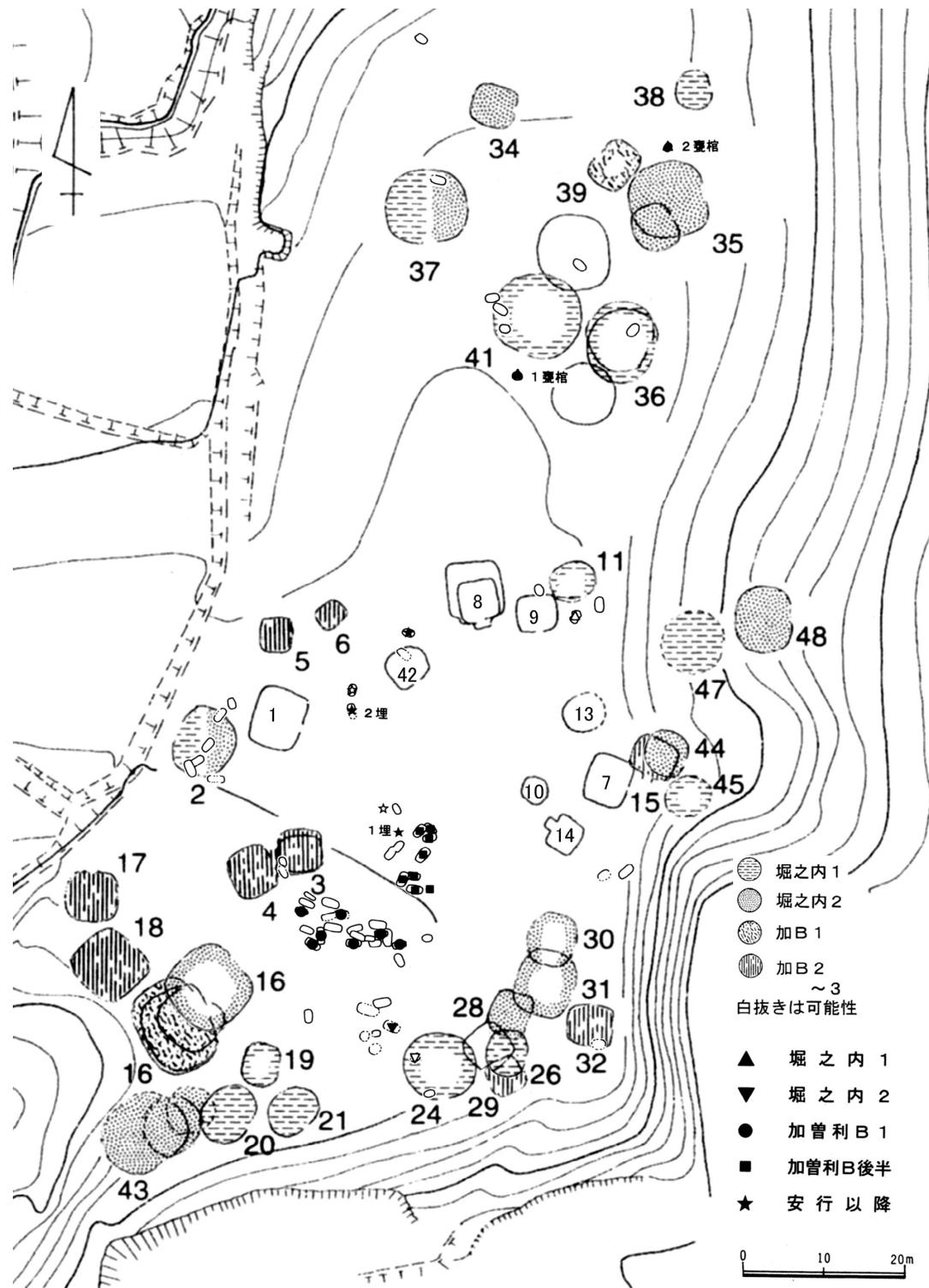
山田大塚遺跡

遺跡は横浜市港北区東山田町2015番地ほかに所在し、有間川と早渕川とにはさまれた台地上に位置する。遺構は標高40m～47m付近に分布する。堀之内式期の住居址は27軒が検出されており、堀之内1式期が18軒、堀之内2式期が5軒、1式または2式のものが2軒であり、堀之内1式が主体的である。また住居址の重複分も1軒と勘案するならば住居址数は39軒に及ぶ。他の遺構としては時期不明を含め掘立柱建物址8棟、墓坑3基、貯蔵穴66基などが確認されている。また墓坑に関してはこれとは別に2軒の住居址内から住居に伴うと考えられるものが検出されている。

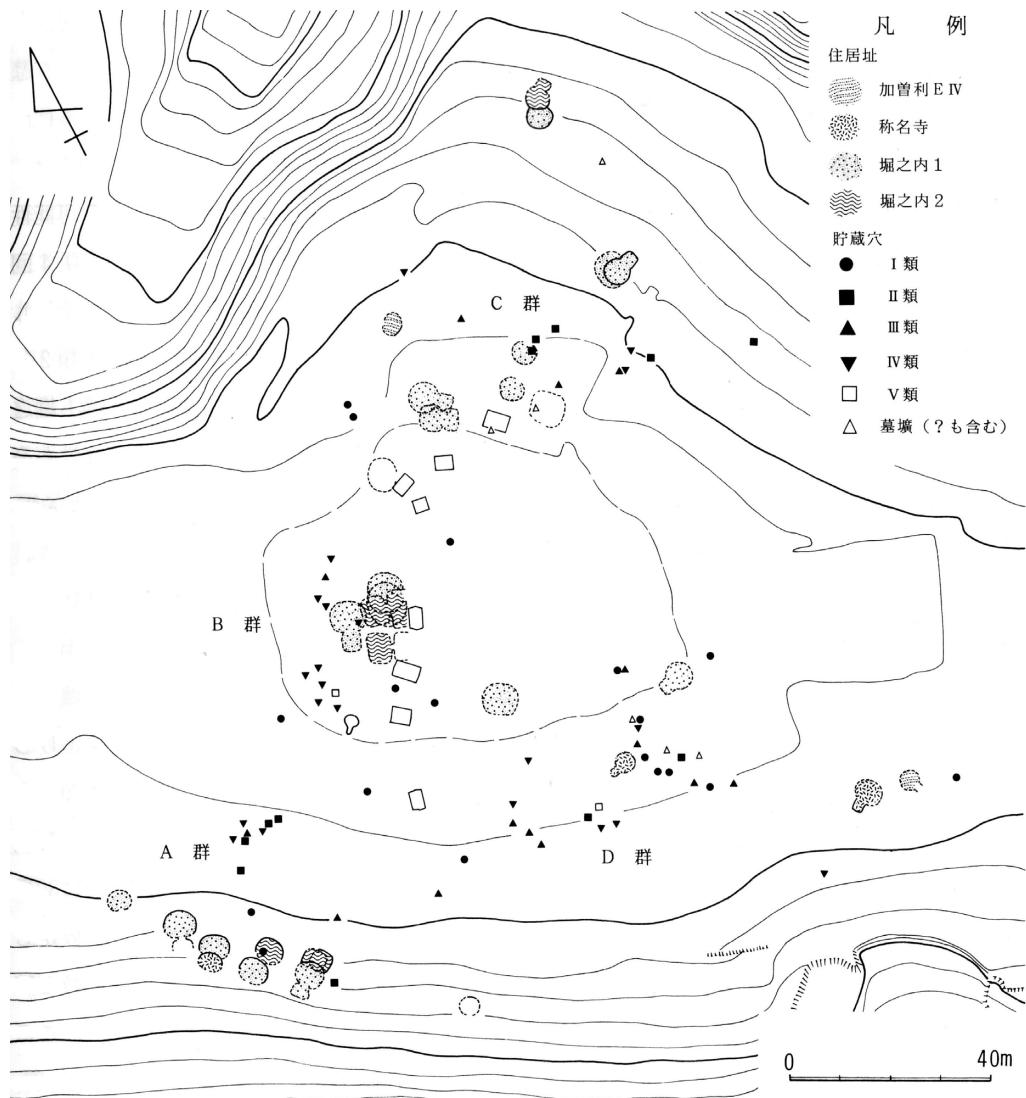
住居址の分布は住居址群としていくつかのブロックに分けて捉えることができる。台地の南側の谷に面して列をなして検出された一群（A群）、台地の中央で検出された一群（B群）、北側の緩斜面で検出された一群（C群）である。各住居址群にはそれに対応すると考えられる貯蔵穴群が近隣から確認されている。

貯蔵穴群はA群では背後の斜面上方の平坦面に、B群では西側に近接した位置にまとまりが存在するが、C群では周囲に散在したありかたを示す。また、遺跡中央やや南よりに集中した貯蔵穴の一群があるが、周囲にその数に対応するだけの住居址数がなく、他の貯蔵穴群と比較して特異なあり方を示しており、集落全体での管轄を疑わせる一群といえる。掘立柱建物址は8棟検出されており、いずれも堀之内式期の所見が得られている。掘立柱建物址は台地平坦面に立地しており、住居址B、C群に近接した位置にそれぞれ配されている。

（粕谷）



第2図 横浜市華藏台遺跡後期遺構配置図 (1/800)



第3図 横浜市山田大塚遺跡後期遺構配置図 (1/1500)

川和向原遺跡

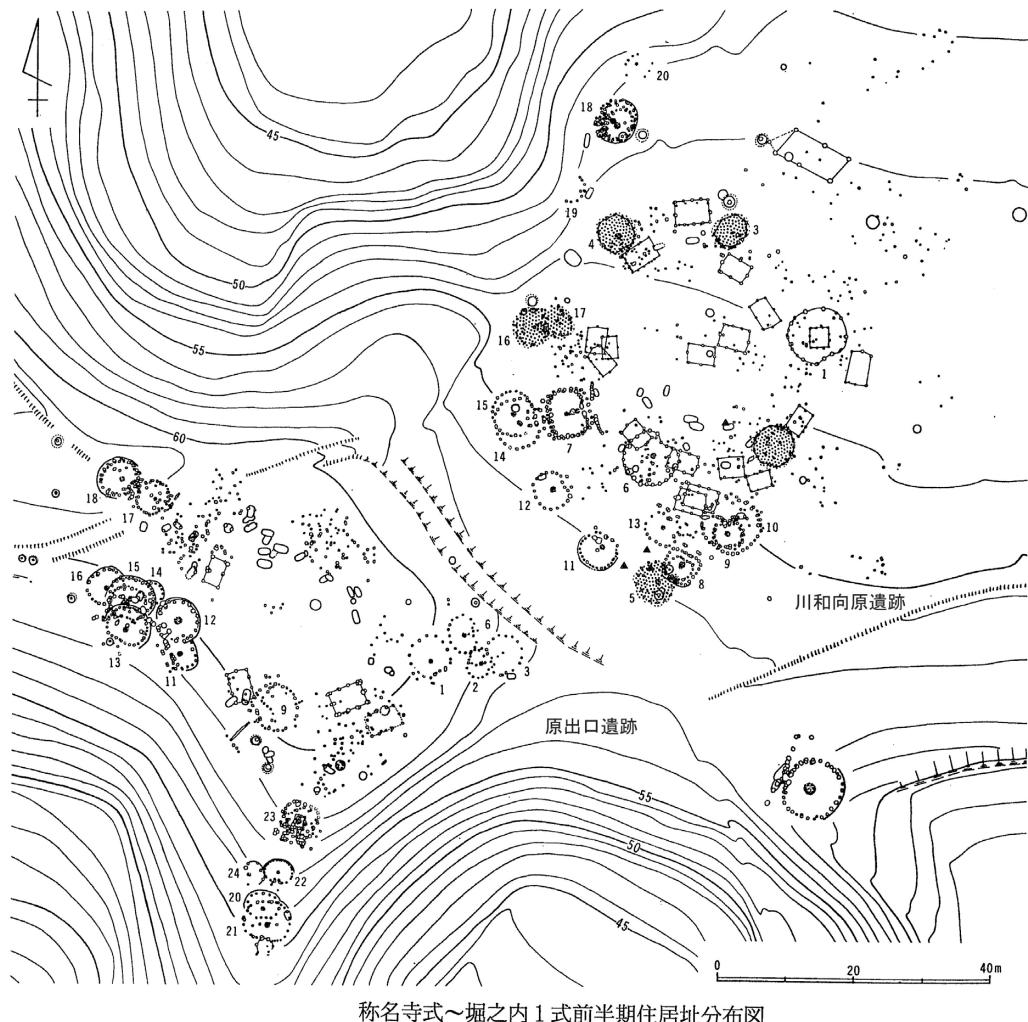
谷本川と恩田川合流地点付近の北側台地上に位置し、原出口遺跡の北側に隣接する。原出口遺跡と比して標高は約4m低位であること、集落は台地斜面部に形成されていることなどが挙げられる。分布検出された遺構は、後期初頭から前葉住居址20基・同時期と推定される土坑52基、掘立柱建物19基、ピット群・時期の判明しない集石などがある。住居址の主体は堀之内1式期後半から堀之内2式前半期が主体となり、一部後期初頭称名寺式期最終末から堀之内1式初頭段階ものもみられる。住居は称名寺式最終末期に発生し、堀之内1式段階では複数の住居が一定のまとまりをもって構築され、堀之内1式終末まで継続する。堀之内2段階では2ブロックに別れて分布している。また川和向原遺跡・原出口遺跡では焼失家屋が多く、社会的背景を探る必要性を指摘している。掘立柱建物の棟数は原出口遺跡と比して、川和向原遺跡が圧倒しており、他の遺構も含めて2つの遺跡はそれぞれ単独ではなく、両者併せた集落形態を把握する必要性を求めている。

(天野)

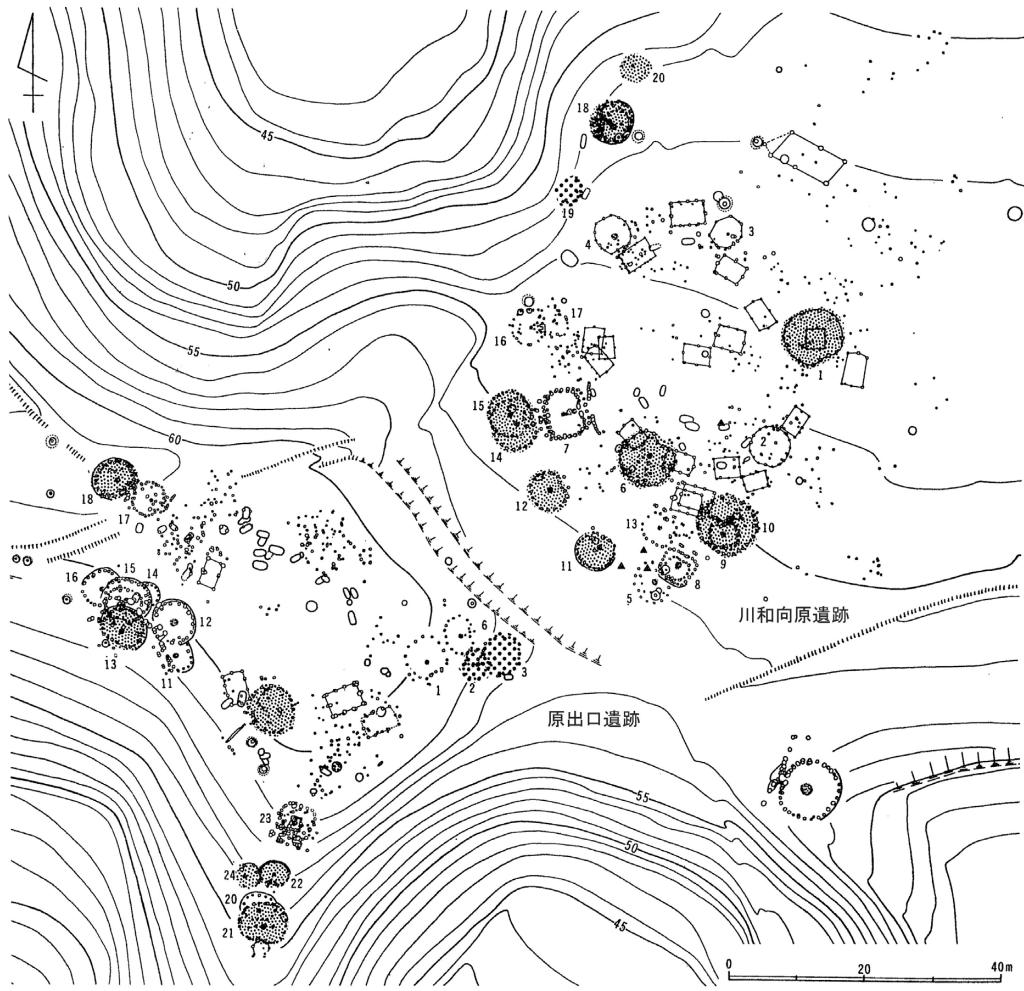
原出口遺跡

谷本川と恩田川の合流地点付近の北側台地上に位置する。遺構は標高54～61m付近で検出されている。同一台地上の北東部の標高のやや下がった地点に、近接してほぼ同時期の集落址である川和向原遺跡が形成されている。検出された遺構は堀之内1式後半から2式期の住居址18基、同時期と推定される土坑13基、墓坑31基、掘立柱建物址4基、ピット群がある。堀之内1式終末期の住居址群は、台地西側斜面部の住居群とこの北側の一群、および南側に張り出す尾根状斜面の住居址群（「住居址ブロック」）に分けられるが、出土遺物がなく時期判定の困難な東側の住居群も同時期の可能性が推定されている。この住居址群のブロックは堀之内2式期にも引き継がれるが、各ブロック毎の住居址群は、出土遺物からの時期比定、平面的な位置関係、重複関係の分析から住居1軒を基本とし時間的積み重ねにより形成された可能性が高いと推察されている。墓坑は集落の北～東側に集中する一群と住居址に近接するものがある。掘立柱建物址の検出数については堅穴住居と数量的な不均衡があり、同一地点に繰り返して構築される堅穴住居との関係が注目されている。

(山田)



第4図 横浜市川和向原遺跡および原出口遺跡後期（称名寺式～堀之内1式前半期）遺構配置図（1/1111）



堀之内1式後半～終末期住居址分布図

第5図 横浜市川和向原遺跡および原出口遺跡後期（堀之内1式後半～堀之内2式期）遺構配置図（1/1111）

王子ノ台遺跡

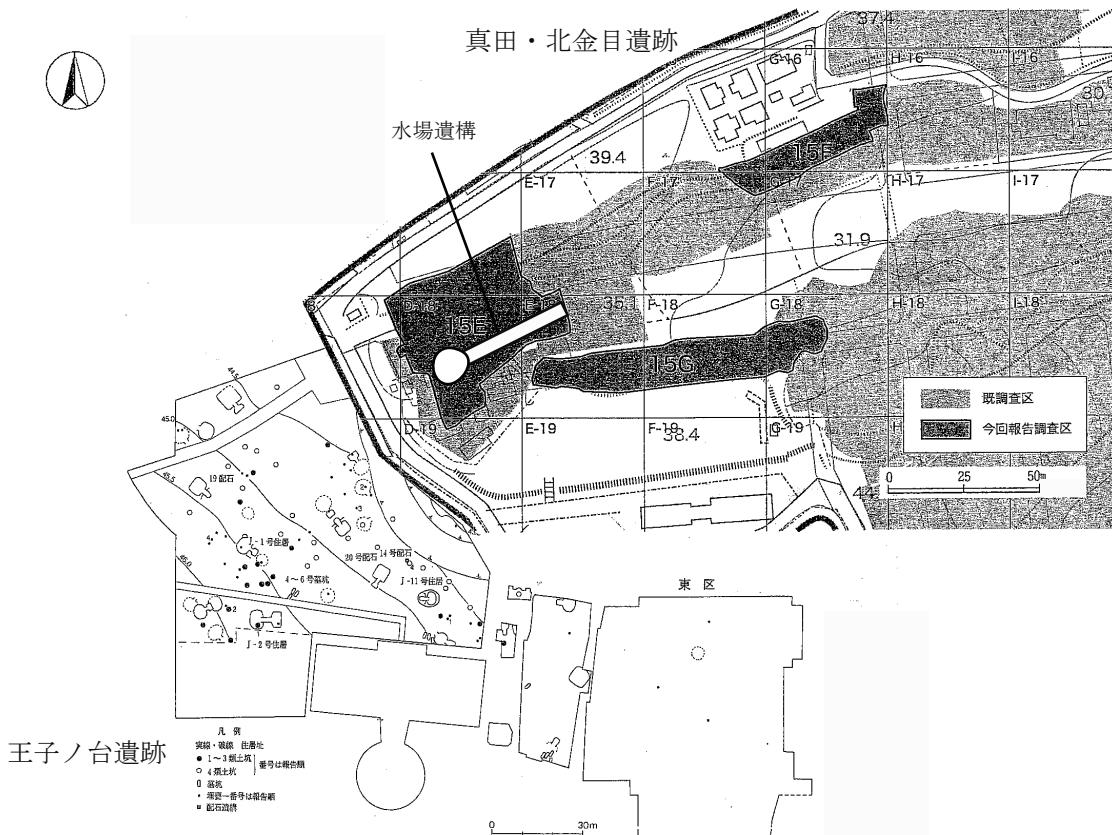
後期前葉～中葉の集落で、住居10数軒と配石遺構2基、墓坑6基が発見されている。調査で配石遺構としたものは住居と考えられる。なお、本報告が刊行されていないため詳細は不明である。鈴川と金目川に挟まれた北金目台地に立地しており、標高は約43mである。住居と配石遺構は堀之内1式～加曾利B2式期までの時間幅がある。墓坑6基のうち4基は土器を伴っており、時期は加曾利B1式期である。

真田・北金目遺跡

後期前葉～中葉の低地遺跡で、平成14年に水場遺構4基、礫敷き水場遺構2基が発見され、神奈川県内で初の事例となった。15E区より発見されたこれらの遺構は、谷斜面の自然湧水を利用した一連の水場遺構群である。礫敷き水場遺構の時期は堀之内1・2式期主体で、加曾利B1式期まで継続する可能性がある。遺物は土器・石器の他、水場遺構に特徴的なスタンプ形石器が出土している。注口土器が多く出土していることから、水場祭祀の可能性が指摘できるであろう。植物遺体はトチノキが主体で、他にクリ・オニグルミ・カヤが出土している。動物遺体はイノシシ・ニホンジカの他、外洋性のコブダイが出土しており、交易によつ

て持ち込まれたか、相模湾に出て漁労を行っていた可能性が指摘できる。

真田・北金目遺跡の水場遺構は、王子ノ台遺跡の集落域から東へ20mの位置にあり、両遺跡は一体のものと考えられる。水場遺構は入谷戸と呼ばれる谷の谷頭に立地しており、標高は約35mで集落域との比高差は約8mである。
(古谷)

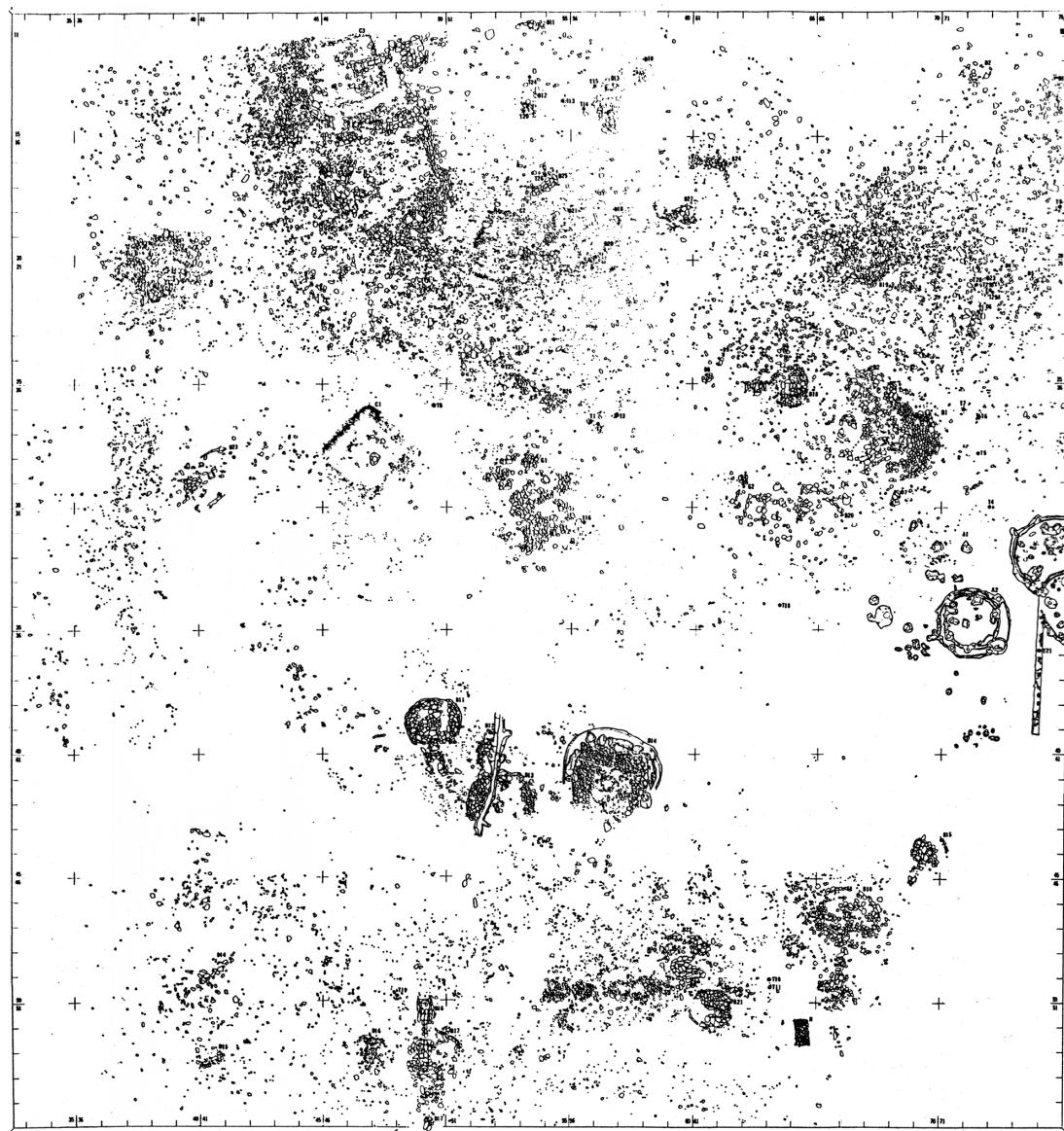


第6図 平塚市王子ノ台遺跡および真田・北金目遺跡後期遺構配置図 (1/2500)

下北原遺跡

遺跡は伊勢原市日向字下北原1272-2ほかに所在する。遺跡の北方を南東流する玉川と遺跡の南方を東流する日向川に挟まれた丹沢山地東麓の日向丘陵上に立地しており、遺構の標高は108m～113mを測る。1972年から1973年に実施された発掘調査により、敷石住居址21軒、環礫方形配石遺構3基、配石墓2群、環状組石遺構1基、配石遺構群2群などの遺構群が発見され、縄文時代中期後葉から後期中葉に亘る集落遺跡であることが認識されている(第7図)。

発見された敷石住居址21軒の時期別の内訳は、加曽利EIV式期のものが3軒(第15・18・28号敷石住居址)、堀之内1式期のものが8軒(第2・11～13・16・17・19・21号敷石住居址)、堀之内2式期のものが2軒(第1・10号敷石住居址)、加曽利B1式期のものが3軒(第14・23・24号敷石住居址)、時期不明のものが5軒(第



第7図 伊勢原市下北原遺跡遺構配置図(1/600)



時期	番号	形態	張出部の方向	小計
加曾利E IV式	15	A 1	S-47.0°-W	
	18		S-77.5°-W	
	28	不明	S-84.0°-E	3
掘ノ内I式	2	1	S-51.5°-W	
	17		S-20.5°-W	
	11	2	S-8.0°-W	
	12			
	13	?	S-7.0°-W	
	21		S-11.5°-W	
	19	B 1	N-45.5°-W	
	16	C 2	S-13.0°-W	8
	1	B 2	S-73.5°-W	
	10		S-21.5°-W	
掘ノ内II式	14	B ?	S-26.0°-W	
	23	3	S-76.5°-W	
	24	1	S-62.5°-E	3
不明	20	A ?	S-4.0°-W	
	22			
	25	1	N-64.5°-E	
	27	2	N-81.5°-E	5
	26		S-46.0°-E	
合計				21

第8図 下北原遺跡遺構の性格別地域図及び敷石住居址時期別一覧

20・22・25～27号敷石住居址）となっている。この他、配石墓群の時期は堀之内2式期～加曽利B1式期、環状組石遺構の時期は堀之内1式、配石遺構群の時期は堀之内1式期～加曽利B1式期、環礫方形配石遺構が加曽利B1式期とされている。

これら遺構群の時期別の変遷は、まず、加曽利EIV式期以降、敷石住居址を中心に馬蹄形状に集落が展開し、堀之内1式期に至り、開放した北西部の空間が配石遺構群や環状組石遺構などで構成される祭祀空間として確立する。その後、堀之内2式期に遺跡の中心部に配石墓が造営され、墓域として營まれていくこととなる。このように、性格の異なる遺構群が遺跡内で占地域を違えながら展開していることが本遺跡の特筆すべき点としてあげられ（第8図）、調査を担当し、本遺跡を精力的に分析された鈴木保彦氏は、縄文時代におけるセトルメント・パターンのひとつとして、「下北原パターン」を提唱されている。（井辺）

曾屋吹上遺跡

遺跡は秦野市富士見町および曾屋字淨屋地内に所在し、水無川左岸の南西に面した台地緩斜面上に占地する。該期の遺構は標高140m～145m付近に分布する。昭和49年度（7403地点）の調査では、後期前葉～中葉の敷石住居12軒および積石状列石、立石・集礫などと呼称された多数の配石遺構が検出されている（第9図）。特に、敷石住居はほぼ同一等高線上（標高143.5m前後）に連なる積石状列石に沿うように分布しており、調査区北西部の4軒、調査区東半部の6軒は一定のまとまりを示している。列石との切り合い関係から、ある程度の新旧関係は把握されているが、住居址1軒1軒の詳細な時期は不明である。ただし、住居主体部が方形プランとなる5号敷石住居および6号敷石住居、環礫方形配石遺構を伴う10号敷石住居は後期中葉（加曽利B式期）である可能性が高い。積石状列石は、直線的な西側積石状列石、敷石住居間を縫うように分布する東側積石状列石に大別されるが、ほぼ一体のものであろう。基本的には敷石住居を切るように構築されているが、住居張出部が明瞭に残る2号敷石住居、10号敷石住居、6号敷石住居とは接続するよう見える。特に、10号敷石住居の西側部分では住居周堤礫と一体となり、折れ曲がっていることから、積石状列石の構築時期は、集落内でも比較的新しい時期である後期中葉に比定できるかもしれない。

また、西側積石状列石の東南側（斜面下側）には、立石6基が集中する立石群があり、さらに西側へ約10m離れた場所には、破碎礫が集中する集礫が認められる。かかる立石は、下部から長楕円形の掘り込みが検出されたものが4基あり、配石墓群の可能性が指摘されている。

平成13年度（200102地点）の調査では、敷石住居5軒、組石4基、配石3基、焼土跡1基が検出されているが、敷石住居は部分的なものであり、全容は詳らかでない。特徴的な組石遺構は、縦石と横石を交互に組み合わせて列石状に配置したものであるが、やはり部分的な検出のせいもあり、その性格は不明とされている。構築時期も不明であるが、3号敷石住居（加曽利B1式期）に前後して構築されたとの見解が示されていることから、やはり列石は後期中葉に比定できるかもしれない。（野坂）



第9図 秦野市曾屋吹上遺跡後期遺構配置図（1/500）

II. 集落分布

ここでは神奈川県内における後期前葉の主要な集落遺跡の分布を概観する。第10図は、『研究紀要23』に住居址検出遺跡として取り上げた、該期の主だった集落址をプロットしたもので、今回は本文で取り上げた集落址を特にマーキングしている。主な集落址の176遺跡のうち堅穴住居址が発掘調査されたものは68遺跡である。市町村別に見ると、横浜市が23遺跡と卓越し、全体の1/3を占める。以下、相模原市が8遺跡、清川村が6遺跡、伊勢原市が5遺跡とつづく。

多摩川・鶴見川水系に挟まれた区域には、多摩丘陵とその南東縁に派生した下末吉台地が展開している。かかる地域の遺跡密集度は極めて高く、28の集落址が確認されている。また、横浜市帷子峯遺跡、華蔵台遺跡、川和向原遺跡、小丸遺跡、矢崎山西遺跡、華蔵台南遺跡、山田大塚遺跡、原出口遺跡で堅穴住居址が10軒以上発見され、この時期の規模の大きな集落址が集中することも特筆され、該期の県内における中核的な地域といえよう。

相模川水系周辺では、20遺跡で見つかり、相模原市の田名塩田・西山遺跡、はじめ沢下遺跡などの左岸域に展開する相模野台地上に立地する数軒の堅穴住居址からなる集落址が分布する。中でも大山山麓に位置する伊勢原市下北原遺跡では、中期後葉から後期後半まで連続する大規模集落が見つかっており、この地域の中心的集落として注目される。また、宮が瀬ダム関連で調査された清川村ナラナス遺跡や馬場遺跡などが発見され、丹沢山塊を取り巻く丘陵上にも遺跡が分布する。

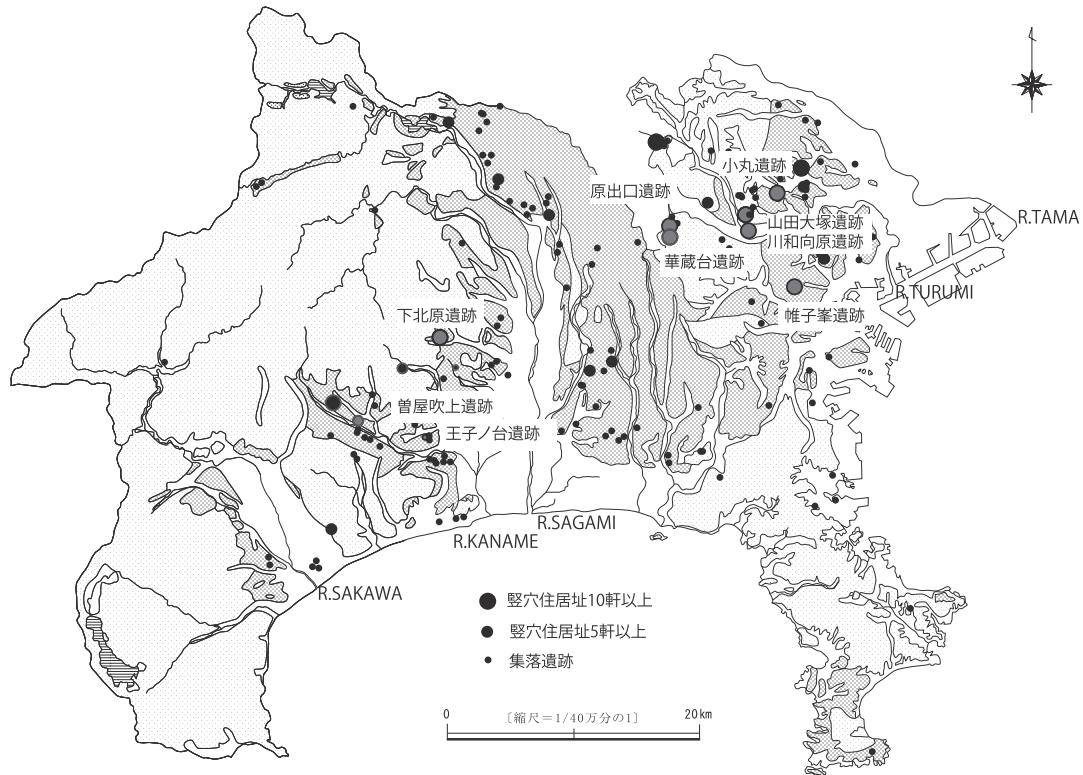
平塚市・秦野市・伊勢原市を中心とする金目川水系周辺域では、11遺跡が見つかり、秦野市曾屋吹上遺跡・太岳院遺跡、伊勢原市子易・大坪遺跡などで、配石を伴う集落址が発見され注目された。また、伊勢原台地とその北縁に広がる上粕屋扇状地や秦野盆地の丘陵上で、近年の大規模道路建設に伴い、配石や敷居住居址の集落址の新たな発見が続いている、関東西南部の中核地として注目されている。

酒匂川水系周辺域は、これまでの調査例は少ないが、森戸川流域の小田原市曾我谷津岩本遺跡などで敷石住居址で構成される遺跡が見つかり、今後早川流域の御組長屋遺跡などとともに、箱根山地東縁に展開する丘陵一帯から中核地となるべき集落址の発見も期待される。

(村松)

第1表 神奈川県内の後期前葉の集落址の動向（%は水系別の推移）(単位：遺跡)

	多摩川・鶴見川水系	相模川水系	金目川水系	酒匂川水系	その他	合計
堀之内期	28	20	11	2	7	68
合計	28 (41%)	20 (30%)	11 (16%)	2 (3%)	7 (10%)	68 (100%)



第10図 今回取り上げた主な集落遺跡位置図（後期前葉）

III. 住居址以外の遺構（補遺）

貯蔵穴

縄文時代の遺構で、平面が円形を呈し、口径に比してある程度の深さがあり比較的大きな容積を有する土坑を「貯蔵穴」と呼称し、機能としても堅果類を中心とした貯蔵に用いられたと想定している。

神奈川県域で後期段階の貯蔵穴が認められる遺跡は、管見の限り15遺跡、212基にのぼった。しかしながら所属時期の特定は遺構出土の土器に頼らざるを得ず、これらのうち厳密に当該段階と判断される遺構は82基で、他は出土遺物が認められずおおまかに後期と把握されるもの、あるいは先行する称名寺段階に所属するものとなる。（※貯蔵穴の認定および所属時期について、記載のあるものは基本的に報告書に拠っている。記載のないものについては形状・出土遺物から執筆者が判断した。この点、数的な異同が生じるが、大まかな傾向に変わりはないものと考える。）また基本的に集成した貯蔵穴15遺跡、212基のうち11遺跡206基（堀之内段階のもの82基中76基）は横浜市と川崎市域のもので、発見された当該期貯蔵穴の圧倒

的多数は東京湾西岸寄りに分布することとなる。これらの地域が横浜市港北ニュータウンを筆頭にして開発とこれに伴う調査事例の集積が著しく進んだ地域であることを念頭に置いても、住居跡などの遺構に比して、他地域の貯蔵穴検出事例が僅少であるとの指摘は可能だろう。また横浜市の小丸遺跡50基（21基、以下括弧内が堀之内式期）、同じく川和向原・原出口遺跡37基（15基）、山田大塚遺跡68基（24基）など、多数の貯蔵穴を伴うのが当該地域の集落遺跡の一つの特徴となる。ただし、膨大な数の貯蔵穴が群集することが群集することが知られる前期の東北地方、中期の東京湾東岸域に比較し、数的には及ばず、また住居跡群に付帯するような分布状況を示すことは先学（石井1990・1999、坂口2003）の指摘するところである。

検出された貯蔵穴には、開口部に対しきな底面を有し断面がフラスコ状を呈するもの（I類）、底面が平らではなく断面が袋状を呈するもの（II類）、開口部と底面の差が小さく断面が円筒状を呈するもので口径よりも深度が大きいもの（III類）、開口部と底面の差が小さく断面が円筒状を呈するもので深度よりも口径が大きく、いわゆるタライ型を呈するもの（IV類）がある。断面は円筒形であるがIII類やIV類には、壁面がやや内傾するものがあるなど、実際にはI～IV類の形態上の違いは漸移的ではある。またI～IV類に加え、一見柱穴状を呈するが、規模が大きくまた口径よりも内径が大きい袋状を呈し、また覆土の状況から通常の柱穴とは見なされないもの（V類）をここで上げておきたい。ただし本遺構については貯蔵穴ではない可能性もある。またI類からIII類はさらに、底面にピットを有するIa類・IIa類・IIIa類と、底面にピットを有しないIb類・IIb類・IIIb類に分けることができるだろう。なおタライ状を呈するIV類にはこのピットが認められず、穴の形状とピットが係わっていた可能性が指摘出来るかもしれない。

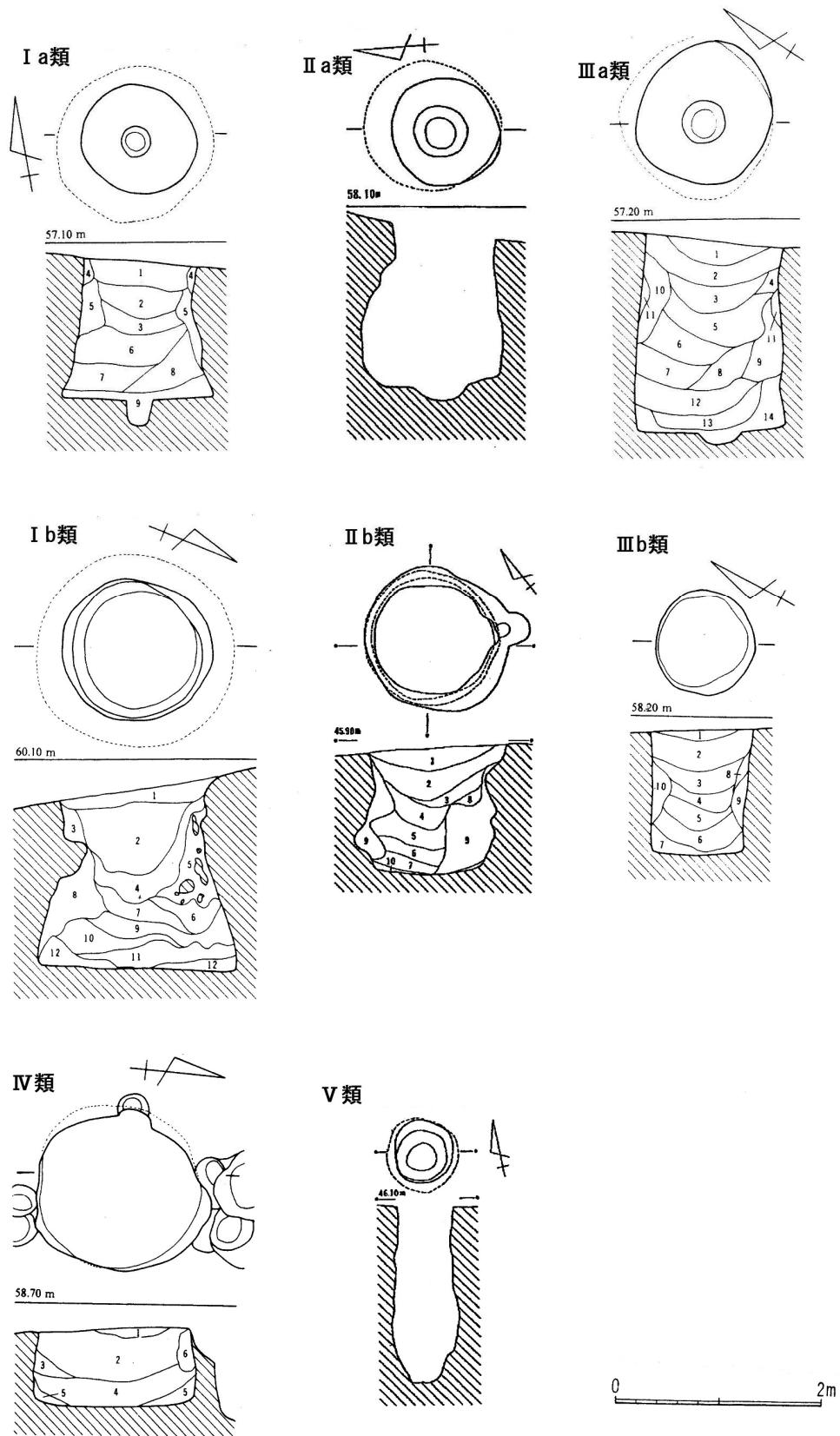
集成した事例の内、Ia類は小丸遺跡（6基）、川和向原・原出口遺跡（6基）、山田大塚遺跡（4基）、帷子峯遺跡（2基）、稻ヶ原遺跡A地点（1基）、岡上丸山遺跡（1基）の6遺跡20例、Ib類が小丸遺跡（3基）、川和向原・原出口遺跡（2基）、山田大塚遺跡（3基）、篠原大原遺跡（2基）、帷子峯遺跡（1基）、華藏台南遺跡（1基）の6遺跡12例あり、Ia・Ib類ともに堀之内1式期の所産であった。

IIa類は川和向原・原出口遺跡（2基）、西富岡・向畑遺跡（1基）の2遺跡2例、IIb類が小丸遺跡（1基）、山田大塚遺跡（2基）、華藏台南遺跡（1基）の3遺跡4例で、やはりIIa・IIb類とともに堀之内1式期の所産である。

IIIa類は小丸遺跡（2基）、山田大塚遺跡（1基）、帷子峯遺跡（1基）、相原八幡前遺跡（1基）の4遺跡5例、IIIb類は小丸遺跡（2基）、山田大塚遺跡（6基）、帷子峯遺跡（1基）、篠原大原遺跡（3基）、西富岡・向畑遺跡（1基）の5遺跡13例ある。IIIa・IIIb類ともに大半は堀之内1式期の所産であるが、篠原大原遺跡のIIIb類1例が堀之内2式期末であるほか、小丸遺跡IIIb類1例にも堀之内2式期と考えられる1例がある。

IV類は小丸遺跡（6基）、川和向原・原出口遺跡（3基）、山田大塚遺跡（3基）、牛ヶ谷遺跡（1基）、篠原大原遺跡（3基）、帷子峯遺跡（1基）、稻ヶ原遺跡A地点（5基）、県営岡田団地内遺跡（2基）、宮ヶ瀬遺跡群馬場No.6遺跡（1基）、の9遺跡26例がある。IV類には堀之内1式期と2式期のものがあり、小丸遺跡の2基、山田大塚遺跡の3基、稻ヶ原遺跡A地点2基が2式期の所産である他、県営岡田団地内遺跡の2基、宮ヶ瀬遺跡群馬場No.6遺跡の事例も2式期の事例となる。

V類は川和向原・原出口遺跡（2基）、山田大塚遺跡（1基）、篠原大原遺跡（2基）、稻ヶ原遺跡A地点（1基）の4遺跡6例があり、ともに堀之内1式あるいは堀之内式と見られる土器が出土している。堀之内2式は認められずの堀之内1式の所産としてよいだろう。



第11図 貯蔵穴 I a類：小丸125号 I b類：小丸92号 II a類：原出口53号 II b類：山田大塚22号
III a類：小丸124号 III b類：小丸191号 IV類：小丸104号 V類：山田大塚12号

各形態を通観すると、Ia・Ib類、IIa類、IIIa・IIIb類、そしてV類は堀之内1式期でのみ認められ、IIb類とIV類が堀之内2式まで存続することとなる。また小丸遺跡でIa・Ib・IIb・IIIa・IIIb・IV類、川和向原・原出口遺跡でIa・Ib・IIa・IV・V類、山田大塚遺跡でIa・Ib・IIb・IIIa・IIIb・IV・V類が、堀之内1式期の同一遺跡内に認められることから、I～Vの各類型は、形態上のバリエーションとして共存し、用途や貯蔵物の量によって使い分けられていたと考えられる。これらが堀之内2式期に向け、少數のIIb類を除けばタライ型のIV類に収斂していく時間的変遷をあわせて指摘できる。

既に当該プロジェクトによるこれまでの集成で明らかのように、神奈川県域において遺構としての貯蔵穴は、前期や中期において顕著な存在ではない。当該地域において貯蔵穴が顕著な存在となるのは、縄文時代後期の初頭から前葉である。加えて貯蔵穴は、上述したように県域全体に万遍なく認められるものではなく、東京湾東岸周辺にのみ顕著な分布傾向を示すものとなっている。前期の東北あるいは中期の東関東・東北地方の集落遺跡において貯蔵穴は、群集し膨大な数が発見されているが、神奈川県域（より限定的に東京湾東岸域）に貯蔵穴が作られる後期前半、これらの東北・東関東穴がほとんど認められないである。かつ東京湾西岸地域の貯蔵穴が数的に限定的で群集することがないのも、すでに見てきたとおりである。

縄文時代の貯蔵穴については、中期における貯蔵穴と打製石斧出土量の多寡との数量的な比較を通じ、生業活動の地域的な差異を抽出した今村啓爾による優れた論考がある（今村1989）。しかしながら神奈川県域や周辺地域における貯蔵穴の分布上の偏在とその消長は、単純に植生や生業活動の面からだけでは説明しきれない内容を持つ。縄文時代後期初頭から後期前葉に、それまでの中期的な社会あるいは生業から後期的なそれへの変換点にあって、当該地域に貯蔵穴が受容されたことは現象面として間違いない。分布状の偏在や消長といった問題は、低地の貯蔵穴あるいは地上式の貯蔵施設を含めた貯蔵施設全般との比較検討、また貯蔵物の管理や分配といった社会経済的な側面から多角的に検討されていくべき事項であろう。

（小川）

IV. 土器以外の遺物

1. 石 器

ここでは堀之内式期の石器について述べる。第12図は代表的石器資料である。掲載遺物は、堀之内1式期・堀之内2式期と考えられる遺構出土資料から構成されたようにした。当該期の各遺跡、各遺構出土石器資料の出土量や存在比率は提示する必要があったが、各資料の掲載内容にばらつきがあると思われたため、今回は提示しなかった。

石鏸（1～5） 各時期を通じて基本的に凹基無茎鏸（1・4・5）がほとんどである。平面形は正三角形に近いもの・二等辺三角形をなすもの、エッジ部分も直線的・やや膨らむもの・軽く凹むものなどがある。平基無茎鏸（2）・平基有茎鏸（3）は少量である。石材は黒曜石が多く、他はチャート等が少量ある程度である。

石錐（6～8） 扁平・楕円形の礫を素材とし、礫の長軸あるいは短軸方向の縁辺に紐掛け用の打ち欠きを施したものである。打ち欠きは2箇所のものが多く、4箇所のものは少ない。また、礫の表面に紐を固定する為と考えられる溝状の切り込みが施されたものもある。用途については漁網錐と考えられているが編み物石という説もある。

狩獵具	漁労具	植物加工具	磨石・礫石・凹石・石皿類	土掘り・伐採具	打製石斧	磨製石斧	伐採具	加工具
石鏃	石錐							
1 曾我谷津岩本 1住								
2 上粒屋・秋山上 J2住								
堀之内1式期								
6 中里J1土坑								
3 篠原大原 35土坑								
5 北側貝塚南 J7土坑								
堀之内2式期								
4 太岳院 91-1地点 J1數石								
7 表の屋敷J1土坑								
8 太岳院92-5J1數石								
11 黒場J1配石								
12 北側貝塚南J7土坑								
14 太岳院93-1J1住								
17 太岳院91-1J1數石								
20 太岳院91-1J2數石								
22 太岳院91-1J2數石								
10 はじめ涙下 J2配石								
13 山田大塚35住								
16 太岳院91-1J2住								
19 稻ヶ原A-B-6住								
18 太岳院93-4J1-2配石								
21 太岳院91-1J2住居								
23 上粒屋・秋山上J2住								
24 上粒屋・秋山上J2住								
25 山田大塚3桿立								
26 表の屋敷J9燒土址								
27 太岳院91-1J1數石								
28 久保ノ坂J1埋設土器								
29 曾我谷津岩本1住								
30 寺山金目原1住								
31 池端SII4								

第12図 堀之内式期の石器 (S=1/5)

敲石・磨石・凹石（9～13） 片手で握れる大きさの円礫を用い、その表面あるいは側面に敲打痕を有するものを敲石（9・12）、摩耗痕を有するものを磨石と呼ぶが、敲打痕と摩耗痕を有する資料（10・11）も多く出土する。また、礫の表面が敲打により凹んだものを凹石（13）と呼ぶ。出土量は各遺跡で多く出土し、用途としては植物などの食料加工に使用されたと考えられる。

石皿・台石（14） 大形で扁平な礫を素材としたものに石皿・台石がある。礫の表面には使用による摩耗痕が明瞭なものを石皿、明瞭でないものを台石と呼ぶ。石皿の中でも摩耗の顕著なものは、表面の中央部が皿状に凹むものもある。また、摩耗痕と共に敲打による凹みがあるものも存在する。敲打による凹みの多いものは多孔石に分類されることがある。石材は安山岩・凝灰岩・閃緑岩などがある。用途としては植物などの食料加工に使用されたと考えられる。

打製石斧（15～20） 器種としての出土数は相対的に多い。平面形は側縁が平行する短冊形（15・17・20）、側縁が刃部に向かって広がる撥形（16・20）、側縁中央部に挟りをもち両端に広がる分銅形（18・19）などがある。石材はホルンフェルス・凝灰岩・砂岩が多い。用途は土掘り具・伐採具と考えられる。

磨製石斧（21～28） 磨製石斧は器厚が厚手の乳棒状磨製石斧（21・22）と、薄手の定角式磨製石斧（23～28）に分けられる。乳棒状磨製石斧は断面形が円形・橢円形を呈するものが多い。よく磨かれたもの（22）もあるが、表裏面・側縁に敲打痕や剥離痕が残るもの（21）もある。定角式磨製石斧は扁平の礫などを素材とし、研磨を全面的に施し、側縁も平坦に面取りされている。石材は凝灰岩・輝緑岩・蛇紋岩・はんれい岩などが多い。用途は木材の伐採具と考えられる。

石匙・スクレイパー（29・30） 剥片に挟りを入れつまみ部を作り出した石匙は、本時期では横形のものがほとんどである（30）。小形の石匙と、大形の石匙があり、小形のものは剥離が細かく、黒曜石製が多い。大形のものはやや粗雑な剥離で、黒曜石以外の石材で作られることも多い。この他にもスクレイパー（29）も出土するが、これらの石器の出土数は相対的に多くはない。

石錐（31） 剥片の先端部に剥離を加え、先端部を作り出したもの。つまみ部と棒状の先端部をもつもの、細い棒状のもの、不定形な剥片の端部にノッチ状の加工を加え先端部を作り出したもの（31）などのバリエーションが存在する。石材は黒曜石が多い。

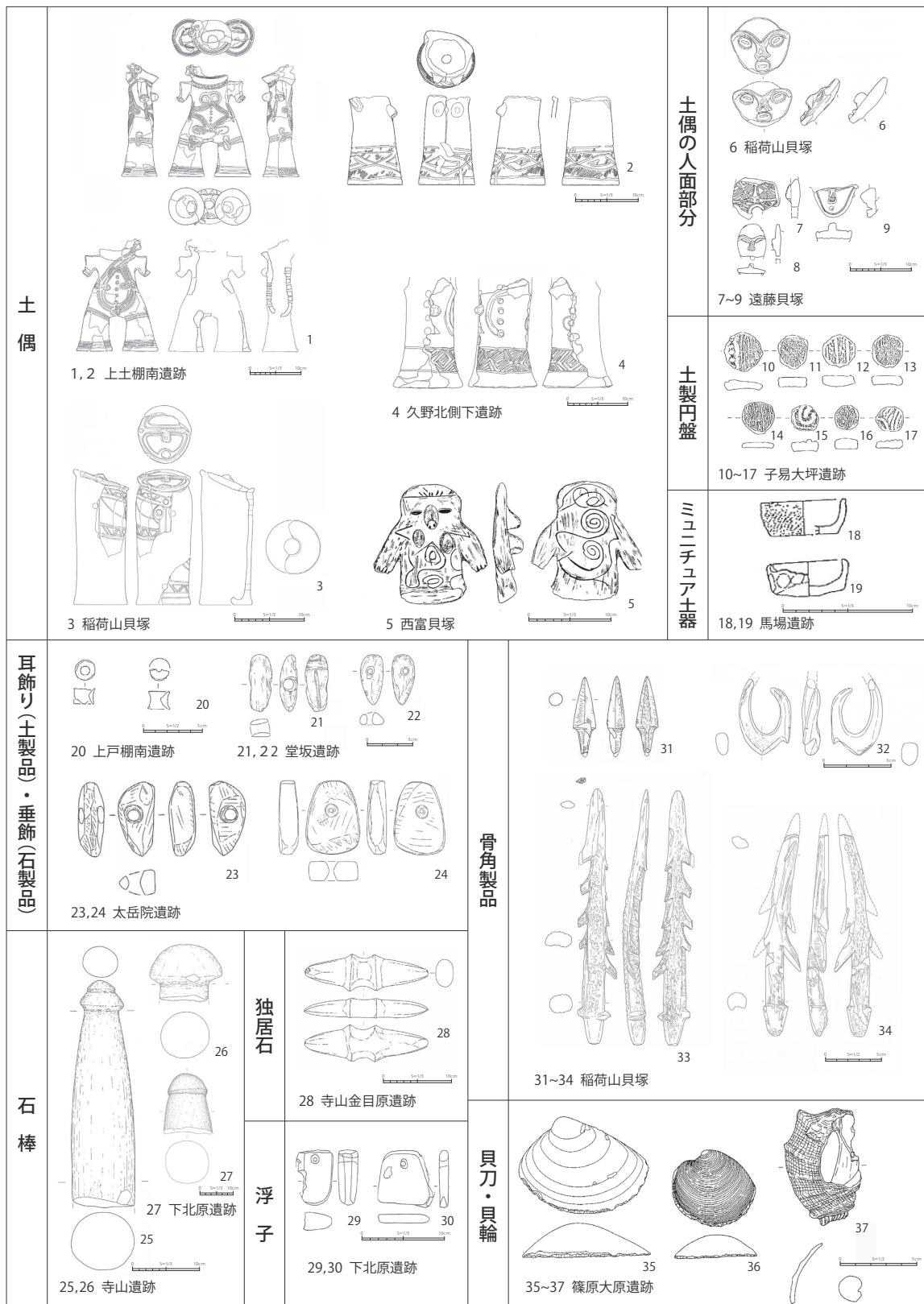
楔形石器・石核 上記の器種の他に、楔形石器や石核などが存在する。

(岡)

2. 土製品・石製品・骨角製品

ここでは土製品・石製品・貝製品の主な出土遺物を取り上げる（第13図）。土製品では土偶や土製円盤、ミニチュア土器を、石製品では石棒や垂飾、浮子を、そして骨角・貝製品では鈎や釣り針、貝刃などを取り上げる。なお、ここで取り扱う遺物の時期設定については、住居跡や土坑など遺構に伴うものが少なく、堀之内式土器におけるI・II式の区分や堀之内II式から加曽利B1式にかかる区分など移行期的なものがあることを記しておきたい。

土偶（1～9） この時期の土偶としては筒形土偶が作られる。1は、綾瀬市に所在する上土棚南遺跡から出土している中空の有脚土偶で、両脚の表現は断面円形で力強く立ち上げ、胴部及び頭部に至る。両腕は小さく表現され取り付けられている。成形として脚部から胴部にかけて約2～3cm程度の細い粘土紐を積み上げており、輪積み痕が残る。文様は、数本の沈線で文様を描き、単節縄文LRを充填している。底面には網代痕も見られる。2は、同様な土偶であるが脚部を作らない土偶で、頭部を欠損する。同遺跡内からは破片



第13図 堀之内式期の土製品・石製品・骨角製品（縮尺不同）

も含めると13点が出土し報告されている。なお、ここで取り上げることができないが、1の筒形土偶と同様な事例では新東名高速道路の建設に伴う調査として秦野市内の菩提横手遺跡から同じような事例の土偶が検出され話題を呼んだが、調査報告書の刊行が待たれるところである。このような筒形の中空土偶の検出例には、長野県茅野市に所在する中ツ原遺跡から出土した国宝「土偶」(仮面女神)などとの関連性が取り上げられるところである。3は稻荷山貝塚から、4は久野北側下遺跡から出土したもので、胸部と顔の表現はあるものの、2と同様に腕及び脚部の表現はない。5は藤沢市に所在する西富貝塚から出土した側面が扁平な土版状のもので、それに土偶の形態を付加している。脚部を欠損するが、顔の表現があり、体部には乳房を表している。現存高で13cmの大きさである。なお、6・7・8・9は藤沢市遠藤貝塚から出土したもので、筒形土偶から剥落した顔面部の破片である。

土製円盤（10～17）・ミニチュア土器（18・19）耳飾り（20） 10～17は伊勢原市子易大坪遺跡から出土しており、他の遺跡からも楕円・長楕円形に刻み目を施した簡素な造りの土製円盤である。18・19は、馬場遺跡から出土したミニチュア土器である。20は、上土棚南遺跡出土の土製耳飾である。

垂飾・石製耳飾（21～24） 21～24は石製のいわゆるペンダントで、21は瑪瑙製、22は翡翠の大珠、23は玉髓製、24は蛇紋岩製であり、いずれも貫通孔を有する。

石棒・独鉛石・浮子（25～30） 25・26は秦野市寺山遺跡、27は伊勢原市下北原遺跡から出土している断面円形の大型石棒の先端に作られた瘤状部分である。石質は、25・26が安山岩製、27は凝灰岩製である。敲打による成形と磨きが加えられるものである。28は秦野市寺山金目原遺跡から出土した砂岩製の独鉛石で全体に研磨が施されている。29・30は伊勢原市下北原遺跡から出土した軽石製の浮子である。下北原遺跡からは全部で12点出土しており、うち3点については、孔が開けられ貫通している。

骨角製品（31～34） 骨あるいは鹿の角を素材としたもので、31は横浜市南区稻荷山貝塚から出土した円錐状の体部をもち細身の茎を作り出した鹿角性の鏃である。32は、針部先端が内湾する単式の鹿角製釣針で、アグは1個付けられている。33・34は、両側縁に逆刺を作りだす鹿角製の鈎頭である。素材の制約があり体部の軸自体が曲がっている。

貝刃（35～37） 横浜市港北区にある篠原大原遺跡の貝製品貝を素材とし端部に刃を付した製品で、ハマグリやカガミガイが利用される。35は、ハマグリ製、36はカガミガイ製の貝刃で、37は貝輪未成品でアカニシ製、殻頂部が除去されているが、孔が小さいことから未成品であろうか。他の出土例では、二枚貝であるイタボガキ、ハマグリやベンケイガイが利用される。巻貝では、アカニシ製のものが出土している。

(小島)

【引用・参考文献】

- 石井 寛 1999 『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25、財団法人横浜市ふるさと歴史財団
石井 寛 2008 『華蔵台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41、財団法人横浜市ふるさと歴史財団
石井 寛 1990 『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告11、横浜市埋蔵文化財センター
石井 寛 1995 『川和向原遺跡・原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19、
財団法人横浜市ふるさと歴史財団
秋田かな子ほか1991「王子ノ台遺跡西区」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2 東海大学校地内遺跡調査団
秋田かな子ほか1992「王子ノ台遺跡西区補足調査」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3
東海大学校地内遺跡調査団
秋田かな子ほか1993「王子ノ台遺跡・真田大原遺跡隣接地」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
東海大学校地内遺跡調査団
若林勝司ほか2011『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書8』真田・北金目遺跡調査会
鈴木保彦 1977 『下北原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会
鈴木保彦 1978 「伊勢原市下北原におけるセトルメント・パターン」『日本大学史学科五十周年記念歴史学論文集』日本文
学史学会
高山純・佐々木博昭 1975 『曾屋吹上-配石遺構発掘調査報告書- <図録篇>』
北原寶徳・今泉克巳 2002 『曾屋吹上遺跡-200102地点-』曾屋吹上遺跡発掘調査団
今村啓爾 1989 「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』渡辺仁古希記念論文集
坂口 隆 2003 『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書5